

は じ め に

北海道麦作共励会は、今年で41回を数えることとなりました。この間、関係各位の皆様には絶大なご支援、ご協力をいただいております。ここに厚くお礼申し上げます。

本年の第1回審査委員会（委員長：北海道農業研究センター杉山慶太作物開発研究領域長）を8月6日に開催し、開催要領、審査基準、推薦調書について検討を行い、本年の北海道麦作共励会の取り組みを決定いたしました。その後、審査委員会の決定を踏まえ、8月24日付けで各地区協会に開催案内を行い、関係機関・団体に、後援依頼と参加推進をお願いしました。

令和2年産の秋まき小麦は、10a当たり収量536kgで前年対比91%、平年対比では108%と上回りました。

春まき小麦では、10a当たり収量359kgで前年対比97%、平年対比では112%と上回りました。

全道の収穫量は、約62.5万トン、当初約53.5万トンの収穫量を見込んでいましたので計画対比117%の収穫となりました。作付面積は、約12.2万haで前年対比101%でした。

一方、品質面では秋まき小麦の1等麦比率が約95%となり、昨年に次ぐ高い割合となりました。また、基幹品種である「きたほなみ」の品質ランク区分では、子実タンパク含量率が基準値をやや上回ったものの他の項目はクリアできました。

春まき小麦では、播種作業は平年より早く、出芽も早くなりました。6月下旬の低温・寡照により一時生育が緩慢となりましたが、7月上・中旬の気温および日照時間は平年を上回ったことから、稈長、穂長、穂数とも平年並みとなりました。収量は、倒伏により低収となった圃場がみられたものの平年を上回り、品質では降雨の影響もなく1等麦比率で91%となりました。

秋まき小麦の収量が平年を上回った要因として、出穂以降の気温が全道的に高かったこと。また、日射量は道東を中心に低かったものの成熟期では平年並みとなり、登熟日数が44日と確保できました。さらにまた、5月の干ばつの影響もあり茎数が抑えられ止葉が立ち、受光態勢の良い草姿になったことなども挙げられます。

秋まき小麦では、全道的に平年を上回る作柄となり関係者の協力で7点の出席となりました。7点の内訳は、個人の部秋まき小麦第1部（秋まき小麦20ha以上）で1点。同第2部（秋まき小麦2～20ha未満）で3点。個人の部春まき小麦で1点。集団の部秋まき小麦で1点でした。

11月5日に第2回審査委員会を開き、推薦調書を基に審査を行い、部門毎の賞を選考し、12月3日までに現地調査を行い、正式に各賞を決定しました。

本報告書は、最優秀受賞者の麦づくりと経営概要をまとめたものです。作成に当たって、杉山審査委員長に審査報告をお願いし、関係地区の審査委員はじめ農業改良普及センター、農協の関係各位に最優秀受賞者の概要をまとめていただきました。本報告書が皆さんの麦づくりや経営改善の一助になることを願っております。

最後になりますが、本年の麦作共励会の実施にあたり、ご協力いただいた関係各位の皆様に対しまして、あらためて心からお礼申し上げます。

2021年2月14日

一般社団法人 北海道農産協会